

---

# 歩いたその先に

路地裏の黒猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歩いたその先に

### 【コード】

N6671U

### 【作者名】

路地裏の黒猫

### 【あらすじ】

道を歩く、旅人達が作り上げた道を。

出会って、別れて。

感じて、想像して。

自分の元居た場所へ帰りたいと、願いながらも、方法がわからない。それでも歩く、留まるとたぶん、帰りたくなくなってしまいうで怖いから。

そんな話。

## 1話

先に見えるのは、唯一つの道。

その先に、見えるのは天高くそびえる山々。

頂上には、雪の冠をかぶる。

それだけで、その山々の標高がかなり高いことがわかる。

あの山を越えるのは、少々無理があると思う。

その山脈の存在感は、自分がどれだけ矮小で、儂い存在だということを知らしめる。

今、歩いている道。

舗装のされていない、旅人達が歩いたであろう道。

長く、人々が行きかうことでできた道。

足元は土のむき出し、石が転がる地面。

後ろを振り向くと、自分が歩いてきた道が、延々と続く。

左手のほうは、雑木林。

そこに立ち入ろうとは、思わない。

背の低い木や、とげのある植物も見取れる。

分け入って入っても、何の収穫も無いだろう。

いや、もしかすると何かの木の実や開けた場所があるのかもしれない。

想像するのは楽しい。

見たことの無い景色、かいだことの無い香り。

はじめてみる動植物。

流れる景色の麗しきことか。

晴れた日の、風の香りや。

曇りの日の、じめつとした空気の匂い。  
雨の日の、降りしきる雨の音と、水の匂いそれに、雨につられて出てくる生き物達。  
雨上がりの澄んだ空気。  
朝の凜とした空気と静寂。  
空は高く、雲は入道雲。

初夏を思わせる日差しに、頬に汗が浮かぶ。  
手で拭っても直ぐに噴出す。

ゆっくりとした歩みのはずなのに、少しずつ体力が削がれて行くのがわかる。

歩き続けた足が、重く。

履き慣れているはずの、頑丈な靴も重く感じる。

視界が、汗でにじみ、しみる。

冷たい水を思いっきり、頭から浴びたい。

しかし、既に水筒に水は無い。

「はあ。」

吐く息は熱を持って、頭の後ろのほうがジクジクと痛む。

左手の雑木林に無理に入って、水辺を探すことも考えたが、徒労に終わる気がした。

それに、雑木林の奥に入って出て来ることができなくなったら、その時点で、詰み。

「ああ。」

見つめる先に、村のような者も見えない。  
少々、本格的に危険な状態になってきた。  
頭痛に加え、眩暈がしてきた。

「はぁ、はぁ。」

水筒を持って、口を付け天を仰ぐが水滴一つ落ちてこない。

「はは。」

乾いた笑いが、風に乗って消えた。

その瞬間、一際強いめまいが襲う。

手を額に当て、左手で掴むところを探すが、空を切る。

膝が折れて足に力がいらない。

酷い吐き気だ。

頭も上がらない。

此処で倒れて、肉食動物達の餌食になるのか。

生きたい

そう、頭に浮かぶが。

視界がかすみ。

重力に押しつぶされるように、横たわる。

「はぁ、はぁ。」

自分の息遣いが聞こえる。  
目を閉じる。

意識が、深遠へと落ちていく。

ふと、視界に影が映ったような気がした。

## 2話

額にひんやりとした、布が載せられていた。

目を開き、体を起こす。

乗せられていた布が、パサリと掛けられていた布団に落ちる。寝床の脇には、水のはいつた硝子のビンがあり、器もあった。

喉が渴いていたがそれ以外は、調子が良かった。

助かったのか？

木で出来た小屋のようなところ。

壁は、木をくみ上げて作られている。

装飾は無く、つるされている物も何も無い。

水をもらうことにした。

手が微妙に痙攣を起こしている。

水差しを持つが、震えて上手くもてない。

「よほど、危険だったみたいだな。」

助けてくれた人に感謝しつつ、ゆっくりと器に注ぐ。  
ひんやりとしていた。

口をつけようと、器を口元へと運ぶ。

柔らかく、甘い香りが鼻腔をくすぐる。



「これは？」

いい香りのする水。

口をつけ、ゆっくりと口内を潤すように口に含む。

ゆっくりと、花の香りが鼻腔をとおり抜け、とても美味だった。

「おいしい。」

思わず呟くほどに、美味だった。

まさか、行き倒れた先でこんな飲み物を飲めるとは思っては居なかった。

「目が覚めたようですね？」

初老の小柄な女性が、扉から現れた。

髪の毛は全て白く染まっているがツヤやかだ。

まだ浅いが、刻まれた皺は優しく柔和な雰囲気、醸し出していた。

「これは？」

普通、助けてもらったのだから、感謝の言葉が先に出る物だが口に  
した物があまりにも美味だったため、気になってしまった。

「ふふつ。気に入っていただけましたか？いい香りのする花びらを、  
弱火で煮込んだ物です。少し香りは強すぎましたか？」

「いえ、すごくいい香りです。それと、助けていただいてありがとうございます。  
うぐさいます。」

女性は、首を少し傾げふわりと微笑む。

「気にしなくても宜しいですよ？困ったときはお互い様です。」

ゆっくりと自分の脇まで歩いてくる。

その歩き方は、とても綺麗で女性らしかった。

これが、気品という物なのだろうか？

「ああ、自己紹介がまだでしたね？私はフローといいます、夫に先立たれこの家で一人でくらししていますわ。」

「ご丁寧にも、自分は望のぞと言います。横になった状態で申し訳ありません。」

「いいえ、体調はどうです？」

脇の椅子を引き寄せて、座って俺の顔をのぞく。

初老の女性に思わず、どきりとしてしまったのは秘密だ。顔に出てはいないだろうか。

「おかげさまで、かなりよくなりました。」

いつの間にか、手の震えも止まっていた。

「それは、よかった。でも、何故あんな場所で倒れていたのですか？」

思わず、目をそらして俯いてしまった。

「ああ、言いにくいことがあるなら無理に、語る必要はありません。」

「

やはり、優しい表情で柔和に語りかけてくれる。

「いえ、助けていただいた身ですし、信じてはいただけないとは思いますが……。」

フローさんが少し、ムツとした表情が豊かな人だ。

「私は、安易に人を疑うのは好きではありません。さあ、おっしやってくださいな。」

俺は思わず、ふっと笑ってしまった。

この場所に来て。いや、この世界に来てから此処まで心穏やかに、会話が出来るとは思っていなかった。

優しく語りかけてくれる人が、家族以外にもいることをはじめて知った。

「自分は……。」

## 2話（後書き）

### 薔薇水の作り方

1) ドライになったバラの花びら200グラムと、ミネラルウォーター1500グラムを鍋に入れて火にかけます弱火にして、40分ほど煮込みます。水道水ではなく、ミネラルウォーターです。まあ、少し香りは落ちますが忙しいときは、30分程度でも大丈夫だと思います。

2) そこに、さらに、残りの200グラムの花びらをくわえて、1時間ほど煮込みます。少々短くなるのはかまいません。沸騰はさせないように、弱火で。

3) 火を止めて1時間弱ほどそのままにして良く冷ましてから、最後に静かに丁寧にし器で濾します。

こし器によっては、少し花びらが残るかも知れませんが、それはそれで（笑

小説では、飲んでいますが。

薔薇の花びらの鮮度の心配もありますので実際に作って、飲用にするのはあまり進められません。飲めるものは、市販されている粒状の薔薇水の元のような物があるのでそれをご利用ください。

使い方は、化粧水、うがい薬、香水、あとは、薔薇の香りをさせたい物に振り掛けたり。

布や、服に振り掛ける場合、着色にご注意ください。

写真とかに香りを移したいときは、乾燥させた薔薇の花びらの中にうずめたりすると、結構いい感じに移ります。

### 3話

「……俺は記憶喪失なんですよ。」

俺は嘘をついた。

「まあ。」

口元に手を当てて、さも驚いたような様子。  
演技臭い気がした。

記憶喪失、そんなわけが無い。  
覚えている。

「気がついたら、見知らぬ村の前で横たわっていたそうです。」

これは本当。

「村の方が助けてくれて、その前後の記憶も少し曖昧で。」

これも事実。

「意識がはつきりしたとき、その瞬間俺の居た場所は違っていて感情が、芽生えてきて村を出たいと申し出たら、元旅人の人がいらっしやってその方に、この国、この大陸での旅のしかた。戦い方、簡単な魔術を教えていただきました。」

かなりスパルタで、走馬灯が駆け巡ることは日常茶飯事だった。  
本当に、今思い出すだけでも身震いする。

「顔色が優れませんね？」

表情に出てしまっていたようだ。

「長く話すぎましたか、お休みになられたらどうですか？」

体調はもうかなりいい。

「いえ、体調はかなりいいです、少し師事した方の修行の日々を思い出して……。」

「まあ、それぞれは。そうとう厳しい方でしたのね。」

右手を頬に当てて首を傾げる。

動作一つ一つが本当に、綺麗だ。

「ははは。」

俺は乾いた笑いをするしかなかった。

しかし、今思えばあの修行はかなり実践的だった。武器らしい武器を持ったことの無いただの日本人が狼の小規模の群れなら、なんとか単身撃退できるまでになった。

いや、出来るようになったんじゃないかと、出来なければ死んでいた。

群れに投げ込まれたからな。

「hahaha。」

あれ、目から汗が……。

「その方のお名前をお聞きしたいわね。」

「えっ？何故です？普通……ではないですが普段は本当に普通の村人でしたよ？畑仕事してたまに狩をして。俺を狼の群れに放りこんだり、そんな日常でしたが？」

「……群れに放り込まれたりするのが日常でしたの？」

「H A H A H A。」

普通さ、一対一とか、補助つきで対戦させるよな？そんな悠長なこととはしなかったんだよ。

基礎体力は、こちらに着いて微妙に上がっている感じがしたし、もともと体を使う仕事もしていたし、学校にたまに行って後輩達と汗をかいていた。

それでも、かなり厳しかった。

木剣から、刃引きした軽い剣、重い剣。

双剣。

短剣。

投擲。

あと、格闘訓練。

それらを、じつくりと時間を掛けて、じつくりと体に叩き込まれて……



叩き込まれて。

大事だから、二回いいましたよ？

全てがそれなりに出来るまで、村から出してくれなかった。

それぞれの武器で単身5〜6匹の狼を狩れない限り村を旅立つのは、許されなかった。

格闘で狼と、戦うのは、自殺行為、なので辞めましょう。

.....。

.....。

.....。

.....。

「ほんとうに大丈夫？」

「ゼンゼンモンダイ、アリマセンヨ？」

「そのわりには、言葉が片言なのですが.....。」

苦笑い。

「そういえば、お名前まだでしたね？」

ああ、そうだ。

「そうでした、自分から失礼して自己紹介させていただきます。」

「ええ。お願いします。」

「自分は、深緑の森の村から来ました、ジャン。ジャン・ラルティ  
ーグ。」

ラルティーグの字を言った時。  
女性の表情がはじめて変わった。

## 4話

「ラルティীগ。」

「そうです。」

・・・そういえば俺の目的を忘れていた。  
此処まで、死ぬ思いをしてまで此処にきた理由。  
そして、多分この目の前の女性が、探していた人だ。

「もしかして、貴女がディーナさんですか？」

「ええ、そうよ。貴方・・・いえジャン。貴方がラルティীগの字を名乗るということは・・・。」

そこまで、終始優しく微笑んでいたディーナさんの表情に始めてか  
げりが見えた。

そして、俺の顔を真っ直ぐ見つめる。

気のせいではないだろう、その瞳が涙でゆれていたのは。

「俺の師匠、シド・ラルティীগは1月と4日前に亡くなりました。」

俺は、引っかかることなく言い切ることが出来た。  
最後までいわなければならぬ。

「師匠・・・シドは最期に貴女に伝言を伝えるようにといわれました。」

肩がびくりと動いた。

視線は、俺をしっかりと見据えていた。

恐らく少しでも下を向けば零れてしまっただろう。

「話して・・・もらえる？」

「はい。」

一語一句間違えることなく伝える。

「こいつに全てを託した、アレを渡してやってくれ。そしたら、村に来るといい。もういいだろう？もう自分を赦したらどうだ。何度も言うが、俺はお前を、恨んだことは一度も無い、だから無理をすることは無い、気にすることも無い。一人でいる必要も無い。村に来るといい、俺の家族がお前を待っている。出来れば俺が迎えにくはずだったのだが、ちよいと無理だ。だから、一番の弟子をそちらに送る。」

ディーナさんは、両手で顔を覆う。

「一足先に、あの子の傍に行くよ。なあに、お前は急ぐ必要は無いお前は十分に罪を償った、もう楽になっただろう？まあ、お前の性格だすぐには来ないか、意地でもこないだろう。」

師匠、シドは最期もう目が見えなくなっても、何かを見つめていた。最期まで、見つめていた女性を、気にかけていた。

「頼みがある、俺とあの子の墓守をしてくれないか。二人じゃやはり寂しいし、あの子には母親がひつようだから。たまにでいい、墓

の前に花を添えてくれ。これが俺の最期の願いだ。ディーナ。愛していた。残りの人生、お前の笑顔の回数が少しでも多くなることを祈っている。お前は悪くない。誰も悪くない。お前の、幸せが俺の願いだ。」

「あ、あ、あ。」

「ディー。愛している。」

「あああああああ………」

最期の言葉、一語一句間違えなく伝えたぞくそ親父。

とめどなく流れる涙が、顔を覆う両手の隙間から零れ落ちる。

「師匠は、最期まで貴女の名前を呼んでいました。そして、貴女の息子さんの名前も。罰せられるべきは自分だと、毎年ある日決まった日に深酒をして、俺に語り掛けました。貴女の想いを、つらさを気づいてやる事が出来なかったと。消えるべきは自分だったと。でも、最期は、笑顔で逝きました。眠りに着くその瞬間貴女の名前をもう一度呟いて笑顔で逝きました。」

「シド……シド……シド……シド……。」

俺は少し軋む体を無理やり動かして、寝台から降りる。ゆっくりと部屋をでる。

外に出る。

空を見上げる。

目の奥がツンツと痛くなる。  
鼻水がでる。

「ああ。」

零れ落ちる。

師匠、あんたもこの人も、どちらも不器用すぎだろう。

見慣れた、双子の月が太陽の光を受けて淡く赤く輝いていた。

## 5話

空を見上げる。

人工的な明かりが無い。

そのために、星々は自らを誇るように、自らの存在を見せ付けるように輝いている。

双子の月は、寄り添いながら日々替わる姿を晒している。

山間の川の近く。

少し平坦で、開けた場所。

庭のような場所には少しの畑と。

手入れのとても行き届いた花畑がある。

少し離れてみれば、ぽつんと見えるだろうこの場所。

周りには家は一つも無く、人がいるであろう集落から歩いて10日以上掛かる。

そんな場所ですら一人。

聞こえるのは風の音と、動物達の鳴き声。

川のせせらぎ。

虫達の歌声。

ただ、それだけ。

無音ではないが、寂しい。

「師匠、あなたは最期まで話してはくれませんでしたね？あの女性から直接聞けということなのですか？」

師匠が好きだった星が、見えた。  
その星の瞬きに眩く。

「あの女性は泣いていましたよ、貴方の名前をよんで。師匠。」

風に乗って消えていく言葉。

誰に届けるでもなく眩く。

師匠は死んだ。

肉体も無い。

この世界のどこにも存在していない。

あるのは思い出だけ。

どこかの誰かの心に残る、思い出だけ。

「俺は貴方を超える日がくるのでしょうか？」

『肉体が滅んでも、魂が消滅してしまっても。それだけじゃ人は死んだとは言えん。』

急にどうした、じいさん。

『まあ、黙って聞け。肉体が滅んでも魂が消滅してしまっても、残るものがある。それは判るか？』

しらねえよ。



『少しは、考えんか。・・・まあいい。それは記憶じゃ。』

はあ？

『思い出、といつてもいいじゃろう。人は何時しか死ぬ、それは唯一絶対の理。しかし、な。それではあんまりだと、思うのだよ。わしはな。』

・・・

『惨いではないか、肉体が無くなっただけで、魂がこの世界を離れただけで、その者が消滅してしまうのではな。その者達が遺した思い、記憶。それらがある限り、その者達は本当の意味では死んだことにはならないと思う。なぜなら、あやつらは目を閉じれば其処にいる。』

夕暮れ時。

世界が真っ赤に染まって。

虫達がいよいよよつるさく歌い始める時間。

星が目を醒まし、煌かんとする時間。

師匠はそらを見上げていた。

一瞬、その姿が若かりし頃の姿に見えた。

『あやつらは、笑顔でいるのだよ。動き回り、駆け回り、罵り合い、ドツキ合い、腕を組んで、酒を飲み交わした。その光景がこの世界いつぱいに広がる。あやつらは、今、目の前にいるのに、死んでしまった。それだけで、たった、それだけで二度と会えなくなるわけ

じゃあない。』

何時もの飄々とした後姿ではなく、  
なにか、沢山の物を抱えている。  
その重荷を、大切そうに抱えている。

『そりやおまえ、死んでしまったときは悲しいさ。何故こうなった、  
何故たすからなかった、何故あのとき手を伸ばさなかった、何故あ  
いつなんだ、何故俺なんだ。後悔することは誰にでも出来る。後悔  
して後悔して懺悔して、赦しをこつ。死者を弔い、墓を建て、手を  
合わせ、涙を流す。』

師匠は、俺の目をじっと見る。

『だがな、それら全てが、生者の慰め。』

俺は目をそらせられない。

『弔いを行い、墓を建て、祈りを捧げる。そうすることで区切りを  
つけ人は忘れていく。弔うことが出来てよかった、祈り続ければ赦  
される。ならば、弔われること無く、祈りを捧げられぬままなら、  
赦されないのか？死者は安心して眠りにつけないのか？違うだろ？  
この世界には、死はありふれたものだ、ちよつと狩にいく、となり  
の集落、隣の家、その途中途中に死は、暗く大きな口をあけている。』

『・・・むう、いかな、上手くまとめられん。この世界には、弔  
われず、祈られず消え行く者達が沢山いる。わしはな、墓を立てた  
り、祈りを捧げられることは生者慰めで、ソレ区切りに忘れようと  
する。人は悲しいことは忘れようとする、だがそれでいいのか？死

者達はソレを願っているのか。わしは違うと思う。』

『覚えていて欲しい、そう願っているに違いないと思う。覚えていれば、思い出があれば彼らはその中で生きられるからな。目を閉じればあやつらに会える。それが証拠だ。だからわしは、生き続ける。わしが生きている間はあやつらは、いきていられるからの。・・・意味がわからないという顔をしているな。それでいい、そのままでもいい。』

じいさん、頭大丈夫か？

『・・・言うに事欠いて、頭大丈夫、か。老いとは恐ろしいものよ、思いでも記憶も薄れていく。死んでいく。そして、自分を長く覚えていて欲しい、一人でも覚えていて欲しいから人は語り継ぐ。』

『多くの物語を、夢物語を。神は生ける者達へ、王は自らの民へ、年よりは若人へ、親から子へ。語り継いでいく。ジャン、お前は長生きしろよ？多くの人々に語り継がれて、思い出になって、記憶に刻まれ、長く長く生きろよ？一人は寂しいものだ、好いたものと離れるのは、悲しいものだ。お前は間違えるなよ？死にとらわれることなく、その立派な足で歩いていけ。お前の道を。』

それから、ちょうど一週間。

眠り続け、夜明けと共に息を引き取った。

おれに、言伝を頼んで。

じいさん。

あんたを覚えている人は、俺だけじゃない。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6671u/>

---

歩いたその先に

2011年11月15日21時51分発行